OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ダンスと哲学する ： 哲学カフェでからだに耳をすます
Author(s)	古後, 奈緒子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 35-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71174
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ダンスと哲学する

哲学カフェでからだに耳をすます

古後奈緒子

"look"や"watch"よりも"listen"という言葉をよく用いるダンスの講師は少なくない。音楽や講師の言葉に？いや、体に耳をすませというのだ。でも、耳をすまして何が聞こえてくるというのか。わかるようでわからぬまま、いつしかワークショップのつまみ食いもやめてしまったわたしは、このほどとある哲学カフェでこの問いを思い出した。

哲学カフェとは、「哲学する」、すなわちわたしたちの生にとって差し迫った問題について考える営みを、ひとびとがともにする場だ。専門家かそうでないかは関係ない。そんな試みのひとつが、今月の初め、ダンスのワークショップと協力して行われた。まちづくりやアートに関する教育・市民団体、NPOが集う「コモンズフェスタ２００３」という催し（懇典院寺町倶楽部が主催）で。ワークショップの講師は、完全即興でダンスの成立する瞬間を問い続けるかたわら、「少しずつ自由になるために」というテーマでワークショップを行ってきた岩下徹。カフェを出すのは、今回がコモンズフェスタ４度目の阪大の臨床哲学研究室のひとびとだ。お題は、「身体からわき出る言葉に耳をすます」。さて、参加者の身体からは一体どのような言葉がでてきたのだろうか。

ワークショップ参加者ほぼ全員に若干の見学者が加わって、３０名ほどでいっぱいになった懇典院の一室。進行役は、哲学カフェについて軽く説明した後、まずは自らワークショップの感想を述べ、参加者にも促した。「意識するより前に動いていることがあった。」「こんなに人の集ってる場所で眠ってしまうなんて、ショック。」今し方身体に起こったことが、驚きとともに語られていく。「ダンスを習うと硬いと言われることが多いんだけど・・・。」こういった違和感めいた感想から、実際に感じられることと相容れない様々なもの（日頃抱いているダンスや自分についてのイメージなど）が意識されてゆく。じつはこれらは、共有される問いを見つけるための出発点にすぎない。しかし、わたしにとって新鮮だったのは、たった２時間のワークショップが身体をかくも揺さぶったこと、そして身体がじつに様々なものを受け容れていることだ。そこで言葉にされたものの幾ばくかは、身体の声、それもふだんは聴かれない声といってもいいかもしれない。このように身体に潜む声は、まさに耳をすます場に応えて出てきたように思われた。

まずワークショップ。そこで行われたことは「体に耳をすます」の一語にとどめるにはあまりある。が、特に記したいのは、音楽が用いられず、講師が非常に切りつめられた言葉で「少しずつゆっくり」、「丁寧に」動作を行うよう促していた点。動くことで生まれる感覚が、「正しい」や「美しい」や「～のため」にすりかわらぬようにとの配慮だろうか。そして哲学カフェにおいては、はじめに進行役が、誰のどのようなことばにも耳を傾けるよう呼びかけていた。この唯一のルールは、まずは聴かれる価値がないと思われ、聴かれてこなかった声に存在の場を与える。語りあう前に、聴きあったことで露わになった声。現代において、人々のダンスに対する要望の少なからずは、このような声を聴くことにあるのかも知れない。

＊本文は「C/P」vol.27に掲載したものに加筆・修正を加えたものである。

ここなおこ
大阪大学文学研究科修了。非常勤講師。１９世紀末から２０世紀初頭にかけての舞踊史、舞踊理論を研究しています。